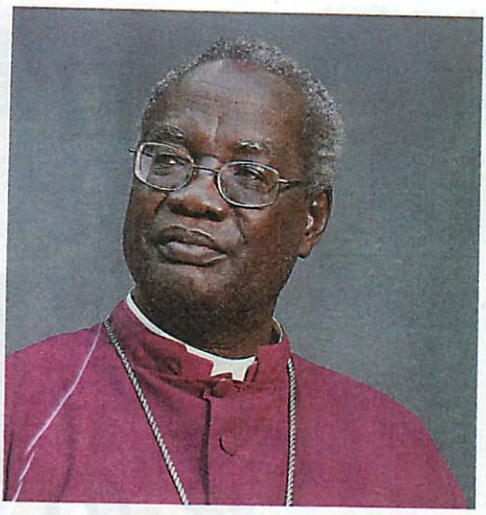
紛争国で平和建設

3教会指導者 教皇と協議

南スーダン



聖公会のデング・ブル・ヤク大主教（CNS）

【バチカン10月27日CNS】独立後5年がたった南スーダンでは総人口の70％以上がキリスト教徒。キリスト教諸教会の指導者たちは同国で続いている激しい紛争に憤りを表明している。

それでも、南スーダンのキリスト教指導者たちは、共に力を尽くすことによって、国民を説得し、対話と和解、協力が平和と繁栄への唯一の道であることを理解してもらえると確信している。

こうした考えに共感を示した教皇フランシスコは10月27日、カトリック教会ジュバ教区のポーリーノ・ルクドゥ・ロロ大司教と、南スーダンとスーダン聖公会のダニエル・デング・ブル・ヤク大主教、南スーダン長老教会のピーター・ガイ・ルアル・マロー総会議長をバチカンに招いた。

3教会の指導者は返礼として、教皇フランシスコに南スーダン訪問を招請した。できれば聖公会（英国国教会）のジャスティン・ウェルビー・カンタベリー大主教のような他教会の指導者と共に来訪し、平和ときょうだい愛のメッセージを直接、国民と紛争を続ける政府や政党関係者に伝えてほしいと願っている。

南スーダンは数十年続いた内戦の末、2011年にスーダンから独立したが、そのちょうど2年後に起きた政治的緊張が紛争に発展してしまった。

国連人権高等弁務官事務所は10月26日、強い口調で警告を発し、政治的な誇張表現が頻繁に民族的な憎悪発言を生み出しており、大規模な残虐行為につながりかねないと指摘した。

教皇フランシスコと3教会指導者が10月27日、バチカンで協議したのは、「国民を分裂させ、国内の共生を危うくしている緊張の背景」や、各キリスト教共同体間の良好な関係によって緊張を解決する方法などだった、とバチカンの声明は明らかにしている。

「カトリック教会で続いている『いつくしみの特別聖年』に鑑み、ゆるしと他者を受容する根本的な経験こそが、平和の建設と最も優れた道である」と強調された、と声明は付け加えた。